

## 第30回総会の準備から

第30回 会長 早 田 義 博

私が30歳になったばかりの時のことである。現国立中野病院名誉院長、馬場治賢先生が故篠井教授を訪れられ何かご相談中私も列席していた。その時馬場先生がこれからの若い医師は30才代に目標を決め、それに向って全努力を注ぐとともに30歳代の終りにはその成果を世に認められるようにならねばならないと言うようなことを私に話された。その時私はただ、私とは無関係でありまたとてもそんな大それたことはできないであろうと深く考えず、篠井教授の命ぜられたことを黙々と行っていた。しかし今になって当時を振りかえてみると、私が35歳、36歳の時胸部外科学会で篠井教授と特別講演、39歳の時第3回肺癌研究会で特別講演をしたことが思い出された。と同時に馬場先生の話されたことがやっと判ったような気になった。早速これを胸部外科学会の会員の方々にご紹介するとともに、若い人に学会で機会をあたえることも必要であると感じ、その方法をどのようにすべきかと考えたが、今回企画した特別講演は、今回は30回目に当ることでもあるし、肺、心、食道外科の過去、現在、将来について発表して貰うには若い人では気の毒であるし、というようなことで大家に司会をしていただき、演者は現職の教授ということに決めざるをえなかった。しかしシンポジウムの演者は教授はできるだけご遠慮していただき、助教授か講師にお願いするように心がけた。依頼した演者の年齢を聞くわけにもいかないので、果して最初の私の考え通りになったかどうか疑問であるが少しでもその方向に進んでくれればと考えている次第である。特別講演も過去のみにとらわれず、将来これから胸部外科に取り組まんとする医師、あるいは若い医師で将来の研究に刺激、あるいは指標となるようなことをお願いした。

外人の招請講演は従来米国よりの医師が大部分であったので、欧州で適当な心外科を専攻している人はいないかと当たったところ、フランス、ボルドーの Fontan が三尖弁の外科をやっており、たまには有名すぎる人でなくても若い方で地道に研究されている人の話しても聞いたらということで、お願いしたところすぐ O.K. の返事がきた。もう一人は肺関係と考えたが、石川先生が会長の時 Beattie、香月先生が会長の時 Benfield を呼ばれ、肺癌関係では外人を呼んでもあまり得る点もなからうということで、心肺外科に共通した心肺不全の治療としての膜型人工肺が適当であろうとの結論に達した。始めはマサセッツ病院の Zapol にお願いしたところ総会時は欧州で重要な学会がありそれを欠席するわけにはいかないので断るという丁重な手紙がきた。折角膜型人工肺を考えたので、サンフランシスコの Hill に頼んだが彼もその学会に出席するので残念乍ら断るという返事で、止むをえないので他の演題に変更をと考えたが、若い人で実際にこの方面の研究をしている人を探すと、California の Bartlett がいるので彼に依頼状を出すと直ちに O.K. の返事がきた。その手紙と一緒に彼の経歴と今までの研究発表の一覧表も入っておりなかなか几帳面な男らしいということが分った。年は38歳である。早速彼にお願いすることにした。

最初の総会の構想は3会場に分れて3日間、最近の問題点について多数のシンポジウムを行う予定であったが、大きな会場が2つしか取れないのでシンポジウムの数も減少してしまったことは残念である。その代りに初日は6時から9時まで round table discussion を24のテーマを決め、発表時間は長くなく討論時間を充分にとってシンポジウムあるいはパネルと同じ程度の比重をもたす

ものとした。

3日目にこれら **round table discussion** の司会者は、全員の発表したものをまとめて会員に紹介するとともに、司会者の考えも入れ、同時に将来の進むべき方向をも発表していただくことにした。司会者には負担が重くて大変気の毒とは考えているが会員のためにがんばって貰うつもりである。そのほか一般演題もあるが、これはできるだけ採用した。昨年第29回総会では一つの施設で10以上もの発表があったのでできるだけ均等にしよう心がけた。総会は全会員のためのものであるということも一つの理由である。しかし何でも採用するというわけにはいかないのです、内容によってはご遠慮願ったものもいくらかはあるが、これはプログラム委員会の意見に従った。

このような案、特にシンポジウムの司会、演者はプログラム委員会のほかに在京の若手教授を中心として、肺、心、食道の三部門について集っていただき相談して私が決定したものである。果してこのような方法が会員の方々のお気に入るかどうか総会が終わってから改めて感想でも拝聴したいと考えている。会場をホテル京王プラザにしたのは第28回総会で曲直部会長が大阪のロイヤルホテルを使われたことによる。同じ屋根の下ですべての行事ができることが理想である。東京では従来、虎の門の教育会館とその周辺が利用されていたが、第一会場から他の会場に行くのに外部をでて歩くのは一寸面倒臭くなるし、雨でも降れば会員に多大な迷惑をおかけすることになる。というので曲直部会長にならってホテルでということに決めた次第である。当方の負担はともかくとしてホテルで学会を開くことは椅子があまりよくないので、一日中坐っていると腰が痛くなること、ホテル宿泊費がたかくつくこと、またホテルでの食事代が街中より高いことで多大な負担をおかけするようである。しかし昼休みは時間をずらし少し長くにとってあるので、新宿駅地下街などに行けばホテルより安上りでもある。

今まで胸部外科学会が東京で行われた時は新宿で行われたことはない。新宿には歌舞伎町という歓楽街があるので学会の骨休みに夜散策するのも一興である。

最後に私の恩師、故篠井金吾教授が第7回、日本胸部外科学会総会を開かれたのは昭和29年、場所は豊島公会堂、集った会員は600名であった。これと比較すると今回は会場といい、参加者といいい隔世の感がする。今後益々日本胸部科学会が発展するであろうことを念願している次第である。それには今回の総会が盛り上るか否かは、会員諸子の活発な討論特に **round table discussion** での討論を希望するものである。

(東京医大教授)